角川文庫
—528—

人生雑感

武者小路実篤

角川書店

昭和二十七年七月三十日　初版発行
昭和四十一年一月二十日　四十一版発行
昭和四十四年十月三十日　改版六版発行

定価は、帯・カバーに明記してあります

著作者　武者小路実篤

発行者　角川源義

印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

角川文庫
人生雑感

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三　株式会社　角川書店
郵一〇二　振東京一九五二〇八
電話東京(33)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　旭印刷・本間製本

人　生　雑　感

武者小路実篤

角川文庫
528

序

「人生雑感」はもと「瞑想」と題したものであり、前三分の二は「人生をかく考える」と題して本になっているものである。題をかえたのは、この題が一番ふさわしいと思うかちに過ぎない。本文は全部を二か月ばかりかかってかいたもので、今まで僕のかいた感想のうち一番まとまっているものと思っている。今まで二冊にわけられていたのを、今度一冊にまとめることが出来たことが何よりの喜びである。

前からわけられていたのが気になっていたのである。

一つ一つよんでもらっても元よりいいが、つづけて読んでもらえば僕のかいた気持がわかってもらえると思っている。

十月十九日

武者小路実篤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人生雜感

ものを窮屈に考えるな。
人生をかたに入れて考えるな。
ありのままに見よ。
要領を得られないことは要領を得るな。

要領を得たような言い方にだまされるな。
だが不明瞭のものを尊敬せよとは言わない。
ものはありのままに、一番すなおな形で見よ。ひねくれて見ず、まっすぐに見よ。

自分は自然をせまく見ようとは思わない。
自然は生きものの目から見たら残酷にも見えよう。だが残酷な目に逢わせたくって逢わしているのではない。
自然をすべて愛で解釈をつけようとしてはいけない。

宇宙は愛によって支配されているか、憎しみによって支配されているか。どっちでもあり、どっちでもないか。

人は自分を楽天家だと言う。
たのしい間はたのしい。
愉快である間は愉快である。
よわる時はよわるが、よわらない時によわった顔は出来ない。

悲痛を愛することが出来るものは偉い。しかし本当に悲痛を愛するものには悲痛はない。
耶蘇にとって十字架はたえられない苦痛であったろう。
しかしペテロにとっては逆磔刑は恵みだったかも知れない。彼の信仰は磔刑台に逆さまになりながら天国の門の開くのを見ていたかも知れない。
苦痛が苦痛でなくなることはあり得る。催眠術にかかったものが、頬を針でつきさされて笑っていたのを見たことがある。自己催眠にかかったものにとって、磔刑も苦痛でないかも知れない。苦痛であるべきはずのものが苦痛でなかったら苦痛ではない。喜ぶべきはずのことが、うれしくなければうれしくない。どっちが偉いかは別である。
苦痛ではあるが、しかもそのうちによろこびがどこかに感じられる時は、両方をすなおに感ずべきであって、一方を否定する必要はない。

人は一を知って満足してはならない。

二を知れ、三を知れ、そしてなお自分にわからぬことが非常に多いことを知れ。

知らざることを知らずとせよ。これ知るなり。

孔子はそう言った。知らないことを知らないと言うことのわかる人は少ない。多くの人は知ったかぶりがしたい。僕にもそのくせがある。慎みもし、そう言う時随分恥かしく思う。そしてこの頃いく分か、知らないことは知らないとはっきり言えるようになった。どんな時、どんな所でも、あいまいなことを知ったふりにはなりたくない。ある処(ところ)までわかっていれば、そこまでわかった顔するのは正しい。それからさきはわからないことを知ることが必要である。

自分はまるで知らないことは知らないと言うより仕方がない。まるで知らないことを知った風するのは愚であり、滑稽(こっけい)であるが、罪は軽い、軽薄にはちがいないが、自他を害する恐れはすくない。すぐ化の皮があらわれ、笑われてすむから。しかし半分知っていること、七分知っていることを、全部知っているような気になるのはいけない。また耳学問で他人の説を納得出来ないことを、そのまま人にまるで知った気になって話すのはいけない。それは半わかりで満足するくせが出来るから。それが満足したら智識はすすまない。本当のことはついにわからない。

我らは話をする時に、つい誇張する癖がある。それも罪のないのがある。しかし誇張して感じるくせは、やがてものの半面を見て満足するくせがつきやすい。

「善人は救わる、まして悪人をや」と言う言葉があるとする。これは嘘ではなく、本当かも知れない。しかし、この言葉が本当にわかるには、悪人とかの言葉の内容を、はっきりしなければならない。言葉の調子にだまされて、何となく面白い感じがある程度でだまされてはいけない。ある深い半面を暗示する言葉を、その言葉の位置から切りはなして、日常の話にもってくるとあやまりやすい。

「悪人救わる、まして善人をや」という言葉の方が普通として本当であることを忘れてはならない。

ただ偽善者、善人面するものは救われない。

第一救われると言う言葉も、面白くない言葉である。少くも安価に言うべき言葉ではない。本当に救いを要する者はこの言葉を知っているであろう。しかし救われたいと切願する気持に到達することは容易ではない。

男子――女子もそうであろう。――救ってくれなぞとはやすっぽく言ってはいけない。岩にしがみついても、救ってもらいたくないと言う人間の方が、すぐ救ってくれと恥知らずに言える人間よりも、どのくらい尊敬すべきであろう。

だが片意地の強いものは、すなおなものにはかなわない。

奴隷根性はよくない。すぐ弱音をはき、他人の同情にすがるものは賤しむべきである。だが苦しい時は苦しい。自己の尊厳を傷つけず、愛から自分を助けてくれ、あるいは同情してくれるも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のには、すなおに喜びを感じ、すなおに感謝すべきである。それが他人の思わくを考えるために出来ないものは、卑怯である。ただ負けじ魂の強いものには、ねじれた力の美はあるが、大きさはない。

よろこぶ時は、すなおによろこべ。心で尻尾をふりながら、顔だけ気むずかしい顔するものは愚である。人類はタンコブ的人間をよろこばない。

ずるい人間よりは、いこじな人間の方が、気持がいい。しかしすなおな人間は更に美しい。

ただ勇気のないすなおさ。真理を尊敬しないすなおさはよくない。それはより大きなもの、より高いもの、より根本的なものにすなおでないことになる。

親にすなおなのは、親にひねくれる者よりいい。しかし親のまちがった要求にすなおになることは更に大事なことにすなおにならないことになる。ただむやみに反対するものは愚である。自分の信念に背くものだけに反対すべきである。それは自分の生命にすなおになりたいためである。

道徳に二つある。一つは内にあり、他は外にある。社会は自分に都合のいいことを道徳の名によって個人に強いる。そのうちには本当の道徳と暗合したものもある。いくら社会でも人間に与えられていないものは、人間に与えることは出来ない。党派心なぞも、人間に与えられたる本能の変形にすぎない。そして自党を愛すると言うことも、他党を憎むと言うことも、人間の本能を巧みに利用することによって効果を上げる。味方を愛し、敵を憎む。それは弱き人間にとっては、

自己保存の本能上必要なことである。しかしそれは道徳とはちがう。だから自党を変らずに愛し、他党を変らずに憎むものは節操の強い人間になる。

ある人には愛国心、忠孝なぞは道徳の最高のものになっている。ある人には資本家を憎むことが最上の道徳かのように見える。それらは、国家的、あるいは社会的利己心とむすびあっていようとも、道徳上の善になっている。社会の制度がかわれば善悪の上にも変化をおよぼす。

ザー時代のロシヤと、今のロシヤとは道徳の標準がすっかりかわったであろう。しかしそれは人間の本心にある道徳律がかわったわけではない。社会が自分の都合のいいように道徳を曲げた、その曲げ方のちがいである。

隣人を愛せ、敵をも愛せ、人類を愛せ、これらは人間本性から出た道徳である。

社会の道徳は変化する。それに背くものは社会的に罰せられるであろう。しかし社会の道徳に従順になれば我らの本心は満足するか、我らの良心は安定を得るか。それは否というより仕方がない。我らの心に落ちつきと、満足を与えるには、我らは内心の声に従わなければならない。

内心の声に従うものは、社会の声に従うわけにはゆかない場合が多い。今は社会が精神的に統一されていない。社会的道徳の権威が日におとろえている。それだけ、内心の道徳の生まるのは容易である。社会的迫害は、統一のない社会においては半分の力を失なう。

我らの行為は善でもなく悪でもないことが多い。善でないものは悪だときめるのはまちがいである。人は善と悪との間に広々した世界のあることを知る必要がある。他人の言行をすぐ善悪で、

かたづけようとするのはまちがいである。善でもなく悪でもない世界。それはのどかな世界である。花さく、悪ではもちろんない。善以上であるかも知れないが、善ではない。

鳥が虫を食う。善ではもちろんない。悪以下であっても悪ではない。鳥は良心に恥じないでいい。

人間の世界にのみ善悪はある。人間以下、人間以上の世界には善悪はない。だから人間は善悪の世界に押しこめられなければならないと言うことはない。

森のなか、田圃路、川ぶちを歩く、それは悪ではないが、善ではない。

詩をつくる、善ではない。悪ではない。だが、たのしい。

しかし善の世界は善の世界であれ。決して善の世界を悪の世界ととりちがえてはいけない。

他人の生命を尊敬することは善である。他人の生命を無視することは悪である。

残酷は悪である。

力のないと言うことに自分で恥じるのはいいが悪ではない。また力のないことで他人を非難すべきでない。ただ力のないことを売りものにして自分の責任をのがれ、あるいは得をするのは悪ではないにしろ、悪に近いものである。更に賤しいことである。

昔において最もすぐれた宗教家は乞食のような生活をした。だが自分の醜い点をさらけ出して、他人に同情を強いたことはない。自分の使命、自分の生命を賤しめはしなかった。

彼らは他人に強いなかった。ただ一杯の水でもくれるものに、すなおに感謝した。感謝の表情をしたのではない。同時に一杯の水をくれることを暗にも強いたことはない。

捧げてくれるものをよろこんでとった。またよろこんでほどこしてくれるものもとった。いやいやくれるものもとったかも知れない。しかしそれはいやいや出すものの方に弱点がある。もらう方は、強いたのではない。

他人の意志はまちがっていたにしても、自ずと自分でまちがいをさとるまで待つより仕方がない。強いてはいけない。それは暴君の始まりである。他人の頭を尊敬せよ。

我らは親しき友達とつきあう。これは悪でもなく、善でもない、水の低きに流れるようなものだ。

自分の嫌いな人とつきあわないのは悪でもなく、善でもない。

だが、私はお前が嫌いだと言うのは、少くも礼儀にはかなっていないようだ。それは正直と言うのではない。露骨と言うのである。そして嫌いな人の不幸をのぞむのは、悪にちかい。嫌いな人の生命をも愛しなければならない。ただその嫌う理由に盲目であってはならない。相手が自分自身の生命を歪にし、また賤しめているために愛せない場合は、その人の生命がもっと自由に、すなおに生きることをのぞむことは忘れてはいけない。

悔い改めない罪人、罪を売りものにする罪人、そんな人間があるとすればその行為をそのまま

是認してはいけない。

善悪以外の世界においては自由であれ。だが善悪の世界においては善を尊敬し、悪を恐れよ。

自分は神とか、自然とか、人間の本質とか、そう言うものを善悪の物指ではかってかれこれ言うものは小ぽけ頭と思う。

宇宙は善でも、悪でもない。

美は善以上と言いたい。だが美にもいろいろある。醜は、悪以下とは言いたくない。だが善人ワラジムシは悪人蜻蛉よりも美しいとは言えない。

美でないものは、醜であるか。否、美でなく、醜でもないのがある。だが、その間の区別は動物と植物の境いのようなものだ。

肉体の美も実に美しい。しかし精神の美は神のように美しい。

神はどこにいるか。彼らの願いのうちにいる。

こうありたいと言うものを神と言う。

最も賢い人を、神のごとく賢いと言う。

最も美しい人を、神のように美しいと言う。

最も望ましい国を、神の国と言う。

神は人間が完全を願うその願いのうちにある。

そして人間が完全を願う力のうちに神の力がある。だから完全を求めてやまないもののうちに神は生き、そして導くのである。

その力の源はどこから出るか。その願いを人間に与えたものは何か。またその願いを生かし切らしどこへ人類をつれてゆくつもりか。

更に完全なもの、更に完全なもの。もう一つおまけに完全なものを人間は生み出したいのだ。これは人間ばかりの望みか。

理窟は何とでも言うがいい。この願いが宇宙をつらぬいている力であると言ってはまちがいか。少くも人間をつらぬいていることだけはたしかだ。芸術家はただこの本能によって支配される。更に完全なもの、完全なもの、残りなく完全なもの。だから芸術家は尊敬される、人間にこの本能がある限り。そして人類全体を、この地球全体を、完全なものにするために努力するもの、その人は尊敬されるべきである。

この本能なくして仕事をし、生活するものは、いかに苦しむとも、またいかに社会的道徳の奴隷になろうとも、心ある人のよろこびとなるわけにはゆかない。

なぜ人間として悪の分子の少ない生活をした画家よりも悪の分子が勝った生活をしていたゴヤの画の方が人類から尊敬されるか。それは完全な美を追求するその熱情による。そしてそれを生かした実力による。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com